グリオが語るアフリカの歴史
～口承伝承の教材化～

厚木高校　大久保　敏　朗

一　はじめに

イスラーム世界に属する西アフリカ、北アフリカの地域に関する歴史を世界史の授業で扱うことは、あまり機会のないことであろう。また、文献史料に乏しいことからも教科書ではそれほどの紙面が裂かれていないことも事実である。しかもどのようなものを切り口にしていけば生徒が興味・関心を向けることができるかという点でもなかなかいい材料がみつからないという問題もある。さて、その中で私が今回とりあげるのは、西アフリカのグリオである。彼らが歌を通して語り継いできた歴史上の人物の物語は、どこまで正確な史実を伝えているかの検証は必要であろうが、彼らの視点による西アフリカの歴史を伝えていることには違いない。そこで今回は口承伝承をどう世界史授業で使えるかという視点で考え、その中で視聴覚教材をどう活用できるかについても検討したい。

二　グリオとは何か～グリオが歌う内容

現在グリオとよばれる吟遊詩人は、ガンビア、セネガル、マリ、ギニアに多く見られる。彼らが歴史上において登場するのは、一三世紀のマリ王国の成立あたりからである。彼らの姓で多いのはクヤテとかジャバテとかコンテやシソコ（スソ）であり、これらの姓はマリ王国成立時に出てくる王家に仕えたグリオの姓を継承する場合にみられる。彼らは狩人や鍛冶屋と同じ世襲集団であり、その限られた集団の中で彼らは歴史と音楽を代々伝えてきた。彼らの中には王家に仕え、王の業績を歌で称えるだけではなく、王の言葉を民衆に伝えたり、他国との折衝の際に交渉役として遣わされたグリオもいる。一方で「狩人が大きな獣を射止めた時、その動物の霊に狩人が対抗できるための特別な歌」（西澤玲子）を歌う狩人グリオというのもいた。そして親方の下で十人程度の集団を作り、近隣の家から村へ、そして祭りの時に訪れ報酬を受ける放浪のグリオもいる。彼らが使う代表的楽器のコラについてだが、この楽器はマリ王国成立時にはなく、一八世紀あたりから使われるようになったと考えられている。演奏する他の楽器としては太鼓とかバラフォンなどを使うこともある。グリオの歌う内容の多くは歴史上の英雄を称えるものである。他には教訓的な歌やパトロンへの褒め歌や時の為政者を称える歌などが多い。宗教的な内容のものは少ない。

三　マリ王国の建国とグリオ

(1) マリ王国の建国と衰亡

一三世紀前半（一二三五年）西スーダンのニジェール川流域に農耕民のマンディンカ（マンディンゴ）人による王国が成立する。この王国はスンジャータ王が建国したマリ王国といい、その後この領域を拡大し、スンジャータ王は周辺のソソ王国などガーナ王国の領域一部を征服した。その後一四世紀のマンサ＝ムーサ王の時代に全盛期を迎える。「黄金のマリ帝国」の噂はメッカ巡礼の話とともに地中海世界にまで広まった。しかし一五世紀以降帝位をめぐる争いと外部からの攻撃によって王国は衰退していく。この王国の交易の要衝であった都市トンブクトゥはニジェール中流域に建設されたソンガイ王国の軍に征服され、貿易の拠点を西方へと移動させていく。

スンジャータ王のマリ王国建設以前の記録についてはアル＝バクリーの記録に、「ニジェール川上流にマラル（マリ）という国があったが、その王はアル・ムスルマーニ（イスラム教徒の意味）とよばれている」という部分があり、すでに王がイスラームに改宗していたことが記されている。西スーダンにおけるイスラームの伝播がかなり早い時期から始まっていたことを示すものである。なお、後にトンブクトゥを征服したソンガイ王国の前身であるガオ王国の王も一一世紀にはイスラームに改宗している。

(2) マリ王国建国に関してグリオが語ること

グリオの伝承ではスンジャータ王の物語は一つの主要なテーマである。これを題材とした歌も多く、代表的な曲には「スンジャタ」「スンジャタ・ファサ」「クラ」などがある。「スンジャタ・ファサ」には「シンボン、お前の弓をとれ／弓をとり、いざ行け／ソロゴン・ジャタよ、弓よとれ」という一節がある。

スンジャータ王に仕えたグリオのバラ・ファセケが歌うこの賛歌に出てくる「シンボン」という語句は非常にすぐれた狩人の名誉ある称号で、力ある者を讃える言葉の一つだと考えられている。「ジャタ」はライオンのことで、すなわちスンジャータ王を指している。歩けなかった彼が立ち上がり、歩み始めた時にバラ・ファセケがこの歌を歌った。やがて彼は狩りを愛する少年に育っていく。その彼が成長し、メマの王トゥンカラに気に入られ、軍にも入り、活躍するようになったが、当時勢力を広げつつあったソソ王国の王スマオロがニアニを攻撃し、この都市を灰塵と化すと、スマオロはマンディンゴの王を名乗った。それを認めないマンディンカの人民はスンジャータを亡命先から探し出し、マンディンゴを救うように懇願した。人民に支持された彼は亡命先からニアニに戻り、スマオロ王の一族と戦い、勝利をおさめた。この勝利に貢献したのはスマオロの甥で、ある事件をきっかけにスマオロに対し反旗をひるがえしたファーコリ・コロマである。このような歴史の流れの中でグリオのバラ・ファセケが両国の交渉で活躍するのである。したがって、ここで登場するグリオは単なる吟遊詩人だけという区分だけではおさまらない人物である。使節団としても活躍するグリオは、彼に終わらない。彼らの活動が常に移動を必要とするため、周辺地域の政治状況などに詳しいということが、グリオを単なる吟遊詩人に終わらせない重要な役割を与えることになったのだろう。

スンジャータに関するグリオの歌から得られる情報は、語るグリオによって微妙に違っている。成澤氏はイギリスの研究家ゴードン・イニスが編纂した三篇の語りもの（バンバ版、バンナ版、デンボ版）とジェリ・ママドゥ・クヤテによるもの（ママドゥ版）を比較検討をしているが、スンジャータが生地を追われた理由やバラ・ファセケ・クヤテの立場についてなどはグリオの住む土地などによって違う。イニスがこのことからスンジャータの実在そのものを疑っていることを白状していることにも成澤氏は触れている。しかし、グリオたちはそれぞれの視点からとらえた歴史を口承伝承という形式で伝えているため、このような違いが出てくるのはやむを得ないことである。その中で真実はどこにあるのか。これこそが歴史をどのようにとらえるのかという一つの教材とも成りうると考えられる。これからもグリオの伝承は様々な視点から比較検討する価値があるのではないだろうか。

四　一九世紀の西スーダンの政治状況とグリオ

(1) アル＝ハッジ＝ウマルのジハード

アル＝ハッジ＝ウマルは一七九四年頃現在のセネガルのフータ・トロ地方で生まれた。イスラーム道士（マラブ）の家に生まれ、イスラーム式の教育を受けた。彼は当時アルジェリアやモロッコを中心に活躍していたティジャーニー派のスーフィー教団に入った。メッカ巡礼を一八二六年に終え、その後一八四〇年頃からフータ・ジャロンを拠点にティジャーニー派の布教活動を展開した。そして故郷フータ・トロへの布教活動の旅に出るが、フランス軍に妨害され、フータ・ジャロン地域の首長とは対立するようになった。彼は一八五〇年代にジハードを宣言し，武力による布教活動を展開するようになった。フータ・トロへの進出はフランス軍に阻止され、うまくいかなかった。

一方、フランス側は一八五七年のメディヌ包囲を契機に、ウマルの国家（トゥクロール帝国）への警戒心を強めるようになった。彼はトゥクロール帝国に対抗する勢力と戦うために一八六〇年フランスとの協調関係を作り、ジハードを推進していった。そしてフランスとの決戦という状況が近づく前の一八六四年に逃亡中マシナの軍によって殺された（自害したという説もある）。その後ウマルの息子アマドゥの代にはフランスの傀儡政権となることもあり、トゥクロール帝国は一八九三年のフランス軍によるセグ陥落により崩壊する。

(2) サモリ＝トゥーレの聖戦

サモリ＝トゥーレはギニアのニジェール川上流のコニャン（コンヤ）地方に生まれた。父はジュラとよばれるムスリム商人の出身であったが、彼自身はアラビア語は読めず、イスラームの知識も乏しかった。また母は非ムスリムの家系であった。彼は若いころから軍事行動に参加し、一八六〇年代にはサナンコロとその周辺を支配し、自らを王（ファーマ）と名乗るほどになり、一八八一年にはニジェール川上流右岸地域に支配権を確立した。一八八二年にはフランス軍と初めて衝突する。彼がイスラームを持ち出すのはこのあたりからとされている。イスラームを学び、一八八四年には自らをイマームと称し、イスラーム化政策を展開するが、これは民衆や親族の反感をかうことになった。一八八〇年代にはこの政策は破棄されるようになった。このイスラームへの接近は当時のサモリの外交政策とも関係している。一八八〇年代のセネガルではティジャーニー教団の連合国家がフランスに抵抗しており、サモリはこのティジャーニー連合の王と手を結んだ。

フランスとサモリの関係は一八八〇年代においては緊張関係を続けつつも、決定的な破局の状態には至らなかった。一方フランスはサモリ帝国とトゥクロール帝国の敵対関係を利用、分断政策を展開し、トゥクロール帝国への支配力を強めていった。一八九〇年代には事態が一気に急変し、フランスは一八九〇年トゥクロール帝国を崩壊させてのちサモリ帝国への侵入をはかり、一八九二年にはビサンドゥグを占領した。サモリは逃亡し、東方に第二帝国を築き、ティジャーニー派の国家との間の反仏連合にも加わっていた。サモリの抵抗はその後も続いたが、コートジボアール方面への進出により、それまで武器調達に関与していたイギリスとの関係が悪化し、武器供給が途絶えた。一八九八年には彼はフランスに捕えられ、一八九〇年に流刑地ガボンで亡くなった。

五　グリオの歌と教材化

(1)アル＝ハッジ＝ウマルと戦士たち

「タラ」という別れを意味する詩の内容をとりあげる。

「彼は行ってしまった・・・・信仰深い戦士は行ってしまった。

／残された我らは導きも、支えも、望みも失った。

／彼は行ってしまった・・・・炎の馬にまたがり

　新しい地平のかなたへと・・・・」

というものである。

これはアル＝ハッジ＝ウマルが「侵略してきたフランス軍をフンタケの兵士とともに掃討した時の凱旋、そして、彼が人民を置き去りにして死の戦いに出発してしまったこと」を歌ったものであると成澤氏は指摘している。ちなみにまた、このアル＝ハッジ＝ウマルとともに戦士ファリケ＝ジャラを取り上げている。フランス相手に戦う勇敢な戦士を讃えた歌はこのような無名な戦士も含め多く歌われている。

(2)サモリ＝トゥーレに関する歌

サモリ＝トゥーレについて直接語るグリオの曲は少ない。成澤氏は彼の弟のケメ・ビラメの方がよく取り上げられていることを指摘している。次の詩は『サモリ賛歌』とよばれるものの一部である。

「ああ、ソネ・カマラの息子よ、

／銃の達人、禿鷹よ！

／この調べこそアルアミ・サモリのための歌

／勇者のためにこそ歌え、臆病者には歌うまい。

／アルアミは日々戦い、兵士は恐れを知らなかった。

／ソネ・カマラよ、貴女は勇者を生んだ

／貴女の祈りは聞き届けられた・・・・」

アルアミはアル＝イマームのことで、一八八四年にサモリはこの称号を名乗るようになった。授業ではこのことからサモリの外交政策とイスラームとの関係について触れてみるのもいいだろう。また「銃の達人」というところからサモリがフランスに対して抵抗する際に使った武器に銃が使われていたこと。それをどこから輸入したのか、なぜその武器が補給されなくなったのかについてイギリスとサモリとの外交関係の変化について触れるのもいいだろう。

(3)その他の戦士の活躍に関する歌

グリオの歌でよく歌われるのはケレファ＝サーネに関するものである。一九世紀半ばに活躍したケレファ＝サーネは射撃の腕が冴えていた。領主はその腕を知り彼を奴隷として売ってしまう。そしてマランバという人物の奴隷となったケレファはやがて身代金として家畜百頭を支払い自由人となり、戦士となって生きる道を選択する。ケレファはガンビア川河口に近いニウミに向かい、ニウミ側についてジョカドゥ軍に対して戦った。その後銃弾に撃たれて死ぬ。ケレファバーという歌では彼の死について触れている。

「パドラからの救援者ケレファは死に、彼の酒は費えた。

／マリアーナ・ナンキのケレファよ、サンカン・ナンキの

　ケレファよ。

／空腹に衣の不足、女の不在。それでもケレファは死には

　しない。

／どんなに神を信じても、ある日、命はおまえを裏切る。

／すべて生ある者は、ある日、必ず死ぬ。」

(4) サンゴールの詩とグリオ

一九三〇年代のパリでは、黒人独特の世界観や価値観などを取り戻そうとする黒人学生たちによるネグリチュード運動が展開された。その中心として活躍したサンゴール（のちのセネガル大統領）の詩を使ったグリオの歌もある。ラミン・コンテがとりあげる「セネガルの狙撃兵への頌歌」を以下にとりあげる。

「君たち、セネガルの狙撃兵たちよ、
　冷たく横たわる熱い手の
／ぼくの黒い兄弟たちよ。
／戦友や血を分けた兄弟以外の者が、
　君たちを讃えることなどできるものか。
　（中略）
／一体、何故なのだ、この爆弾は・・・
／石を一つ一つ積み上げて築いたこの家に。
／一体、何故なのだ、この爆弾は・・・
／ブッシュの茨を切り払い、辛抱強く広げたこの庭に。」

ナチス・ドイツによりフランスが二つに分断された時代に、セネガル狙撃兵はフランス兵として第二次世界大戦において戦った。グリオが取り上げる歌も時代が経つにつれその内容にもより現代的な内容も含まれるようになっている。この詩を活用して第二次世界大戦の授業の中に取り入れる方法もありうるだろう。

六　教材化にあたって

(1) アフリカ史をとりあげる際の切り口として

グリオが語る歴史はマリ王国の建国時の歴史と一九世紀の西スーダンにおける英・仏の植民地化の中でのトゥクロール帝国のジハードやサモリ＝トゥーレの抵抗運動の時期以降に限定される。マリ王国については、建国のところでエピソードとして活用することはできるだろう。ただ、トゥクロール帝国やサモリ＝トゥーレの抵抗運動については、触れている教科書も少ないだろう。ただ、帝国主義政策が展開される一八七〇年代以降のアフリカの抵抗運動で、イギリスの縦断政策とのかかわりで出るスーダンのマフディー国家の抵抗と同じように、フランスの横断政策に対する西スーダンにおける抵抗運動はとりあげる必要はあると思う。アフリカにおける抵抗運動には、ネオ＝スーフィズムの流れを受ける教団の影響がそれぞれみられる。そこまでつなげて考えさせるのは難しいとしても、マフディーだけではなく、西アフリカにもあった抵抗運動の一例としてウマルやサモリ＝トゥーレの抵抗運動をとりあげてもよいのではないか。またその際の授業を行なう上での切り口として活用してみるのもよいだろう。

(2) 口承伝承による歴史を考える上で

アフリカ史研究で最近注目されているのは、いまなお不十分である文書史料を補うものとしての口承伝承である。「アフリカのように文献史料が不十分な地域の歴史研究の場合には、口承伝承が重要な史料の役目を担うことになる。これがアフリカ史研究の史料として認められるようになったのは、一九五〇年代に入ってからのこと」（宇佐美久美子著「世界史リブレット一四アフリカ史の意味」山川出版）である。もちろん、すべての伝承をそのまま活用はできない。その伝承をどう整理し、そこからどんな真実を明らかにするのかという方法上の大きな問題はあろう。一方、歴史とは何かを考えさせる一つの教材としての活用としては十分にありえることだろうと思

う。

(3) 視聴覚教材の活用

グリオの歌のCDは多く出されている。ラミン・コンテやスンジュール・シソコなど代表的な歌手によるCDは比較的入手しやすい。これらの歌手の歌を聴かせながら、授業の導入に使うのもいいだろう。

《主要参考文献》

成澤玲子『グリオの音楽と文化』　勁早書房　一九九七年

宮本正興・松田素二　編『新書アフリカ史』（講談社現代新書）　講談社　一九九七年

岡倉登志『一九世紀の西アフリカにおけるイスラーム化と植民地化』「岩波講座世界歴史二一」　岩波書店　一九九八年

福井勝義他『世界の歴史二四　アフリカの民族と社会』　中央公論社　一九九九年

宇佐美久美子『世界史リブレット一四　アフリカ史の意味』　山川出版社　一九九六年

江波戸昭『二〇〇CD　民族音楽　世界の音を聴く』　立風書房　一九九八年

坂本勉他編『イスラーム復興はなるか』（講談社現代新書）　講談社　一九九三年